地域情報（県別）

【埼玉】若者が性の悩みを相談できるユースクリニックを定期開催-高橋幸子・埼玉医科大学産婦人科助教に聞く◆Vol.2

「普及するスウェーデンのように将来は常設化したい」

2024年8月23日 (金)配信 m3.com地域版

性教育を行いたいと産婦人科医を志し、現在、埼玉県内各地で年間180超の講演をする埼玉医科大学産婦人科の高橋幸子助教。高橋氏は講演のほかにも、「若者が性の悩みを気軽に相談できる場をつくりたい」と「たんぽぽユースクリニック」というプロジェクトを2023年5月から定期開催している。「普及しているスウェーデンのように将来は常設化したい」と話す高橋氏に、プロジェクト開催の経緯と手応え、今後の展望を聞いた。（2024年7月15日オンラインインタビュー、計2回連載の2回目）

▼第1回はこちら

高橋幸子氏（本人提供）

スウェーデンでは各自治体に設置され、専門家が常駐

――高橋先生は、若者が気軽に性のことを相談できる場として「ユースクリニック」という取り組みを学園祭などで定期開催しています。複数の新聞記事などによると、スウェーデンでは普及・常設化しているそうですね。

ユースクリニックはスウェーデンで1970年代に誕生したと言われており、現在は行政の政策として各自治体に１カ所設置されています。国内におよそ220あり、看護師や保健師、助産師などの専門家が常駐して主に15～23歳の男女の性の相談に対応しています。避妊具の配布やアフターピルの処方なども無料で行っています。

なかでも特徴的なのは、保護者の同意がなく受診できることです。日本ではいくら私たち産婦人科医が「あなたたちの味方だよ」と迎え入れる姿勢でいても、現実的に若者は親などに相談をして健康保険証とお金を用意し、来院しなくてはなりません。スウェーデンでは性交同意年齢が15歳とされており、「15歳を過ぎたあなたたちにはセックスをする権利がありますよ」というスタンスでサポートが制度化されているのです。

――ユースクリニックのことはどんな経緯で知ったのですか。

性教育に関心を持ったきっかけや講演活動の展開と同様、こちらも人とのご縁に恵まれました。2018年ごろに東京都であった性教育の勉強会に参加したところ、前の席に講義の内容を全て英語でメモしている若い女性がいたのです。「え、すごい」と思って話しかけたところ、その人が現在、日本の性教育や避妊具の不足を問題視して改善を目指す「＃なんでないのプロジェクト」代表の福田和子さんだったんですね。

私は福田さんからいろいろなことを聞きました。彼女は当時大学生で、スウェーデンに1年間留学して帰国した後でした。日本での主な避妊具がコンドームとピル、子宮内避妊具であるのに対し、スウェーデンにはパッチ薬や女性ホルモンを含んだ短い棒を上腕に埋め込むインプラントなどもあります。こんな話の中で、「ユースクリニック」のことも聞いたわけです。

現地を視察し日本の課題を実感、2023年に県で初開催

――先生は2023年5月、女子栄養大学の学園祭で県内では初となるユースクリニックのイベントを開きました。

福田さんの話を聞いてスウェーデンの状況に驚いた私は2019年に関心のある人を集め、10人ほどで現地に視察に行きました。そこで、ユースクリニックの機能や福田さんの言っていた日本における避妊具の少なさなどの課題を肌身に感じました。

近年、スウェーデンを含めた海外諸国では、女性が行う避妊法としてピルは低用量であっても血栓症などのリスクがあり、また継続して服用することが難しい人もいるので、子宮内避妊具の選択が増えていると聞きます。しかし、日本では若い人向けにそれを勧めていこうという気運はまだないように感じます。

性に関する相談を受けつつ、いろいろな避妊具も紹介したい。若者にもっと性に関心を持ってもらいたい――。そんな思いから、まずはイベントの形でユースクリニックを開こうと考え、2023年に開催しました。

――新聞記事によると、性教育に取り組む「彩の国思春期研究会」が主催したとあります。

これは、熊谷市で40年ほど性教育に取り組んでいる男性産婦人科医の中山政美先生が2008年に立ち上げたもので、医師や助産師、保健師、学校の教員などが定期的に勉強会を開いています。

2007年に講演活動を始めた私も「学びたい」とメンバーに加わった後、「もっと県内各地に勉強の場をつくりたい」と発案し、交流のあった女子栄養大学に同研究会の西部支部を開設しました。熊谷を北部支部として、埼玉県立大学に東部支部を開設。県南部では以前から一般社団法人「人間と性教育研究協議会（性教協）」による「さきたまサークル」が活動しています。これらの展開により、県内各地に性教育に関心のある人が集える場をつくることができました。

彩の国思春期研究会は2023年に一般社団法人化し、私は代表理事に就任しました。さきたまサークルでも副代表を務めています。

「さまざまな医療従事者の協力が必要」

――取材日の7月15日までに16回、学園祭などのイベントや公共施設でユースクリニックを開催しました。参加者の反応はいかがですか。

「若者に来てもらうのはそう簡単ではない」「若者がいる場所にこちらが出向く方が良いのでは」という気づきがありました。私たちが開くユースクリニックでは専門家が相談に対応するほか、幼児から大人まで各年代に合わせて作成した絵本や書籍を200冊ほど並べ、女性用の避妊具を紹介したり、コンドームを性器の模型に装着してもらったり、かわいいコンドームケースを作ってもらったりしています。

学園祭では親に連れられた小さな子や中高生が喜んで体験してくれることがありますが、若者の参加割合はまだ高くはありません。一方で、入間市の子ども食堂で開催したときは反響がありました。「コンドームの着け方を話しますよ」と呼びかけたらそこにいた多くの中高生がわっと寄ってきて楽しみながら話を聞き、体験してくれました。性

に関する話は子どもや若者にとって居心地が良い、リラックスした環境下で行う方が聞きやすい、学びやすいのではないか、と考えるようになりました。

――最後に、ユースクリニックにおける今後の展望をお聞かせください。

ユースクリニックは近年、日本でも少しずつ生まれてきています。神奈川県や京都府、沖縄県などの産婦人科やイベントで行われていますが、私が目指しているのはスウェーデンのように公共の制度として常設化されること。

私が2007年に性教育の講演活動を始めて以来、川越市の市長や教育長、政治家の方などと交流を重ね、私の思いや性教育の課題、ビジョンを伝えてきました。現在、同市職員の方と一緒に常設化の場所を探しているところで、目標に向けて進みつつある状況です。理想としては先述の子ども食堂の事例のように子どもや若者が心地よく過ごせる空間にユースクリニックをつくることができれば、と考えています。

このプロジェクトを進めていくには保健師や助産師、看護師、薬剤師などの医療従事者のほか、お兄さん・お姉さんの立場で中高生に性のことを伝えてくれる大学生の協力も必要です。興味のある方は「彩の国思春期研究会」のフェイスブックでユースクリニックの開催日や動向を発信しているので、ご覧いただけるとうれしく思います。

◆高橋 幸子（たかはし・さちこ）氏

2000年山形大学医学部卒、2001年埼玉医科大学総合医療センター産婦人科に入局。2007年から性教育をテーマに講演を始め、2023年には県内各地182の学校などで実施。現在、同大医療人育成支援センター・地域医学推進センター助教、産婦人科助教、医学教育センターに在籍。

【取材・文＝医療ライター庄部勇太】

記事検索

ニュース・医療維新を検索